

お寺の社会性

生臭坊主のつづやき



竹中尚文

1. お盆明け

近年、お盆のお参りは宗派を問わず盛んになってきたらしい。坊主友達がラジオでそんな話しをしていた。今年のお盆も忙しい思いをしたのは、そんな事もあるのかもしれない。お盆が終わって、思考が半ば停止した中で友人にメールをした。彼は高校時代からの付き合いなのでもう40年になる。お互いの住まいが千キロほども離れているので、顔を合わせることはめったにない。いつもメールのやりとりである。

私は、彼の奥さんがどれだけすばらしい人であるかを書いた。彼からの返信は、「どうしたんだ？」と云うげげんな感じであった。彼

は私に言われるまでもなく、自分の奥さんのすばらしさを知っているだろう。また、私がいくら生臭坊主と言っても友人の奥さんに横恋慕をするわけがない。彼の奥さんは本当にチャーミングな女性でいい人である。女性に不器用な友人がどうやって彼女と結婚できたのか不思議である。

友人にとっては迷惑で不思議なメールであっただろう。私は、友人の夫婦関係にお説教をしてしまったようだ。私はお盆参りでいろんな家族を見て、ハイになっていたのかもしれない。それで、友人に余計なことを言ってしまった。

2. 家族の季節

最近のお盆は家族の季節である、と私は思う。亡くなった家族も含めての家族の季節である。

もともと、私たちの浄土真宗は盆行事に重きを置いてこなかった。だから、お盆の特別のお供え物と言ったきまりはない。お参り先でお盆に何をお供えすべきかと尋ねられることがよくある。そんな時、「家族の気持ちをお供えして下さい」と答える。苦し紛れの答えだと言えればそれまでである。

今年のお盆に私がお参りしたいくつかの家族を紹介したい。

【青原さん】早口のお経を上げて向き直ったら、青原さんが一人で座っている。昨年に99歳のお母さんが亡くなった。結婚をする機会がなかった彼が母親の介護をした。父親は30年ほど前に亡くなっている。75歳になる青原さんが一人になった。これからどうしようという感じが伝わる。先は決まっているのだと言う。今の住まいを売って老人介護施設に

入所するつもりらしい。それはいつのことになるのかは、分からない。では、それまでをどうするか。75歳からの人生設計である。人間は、生きている限り生きる状況は変わる。死ぬまで、人生設計の立て直しである。いろんな要素を含んでこれからがある。次に会うときに、青原さんはどんな話しをしてくれるのだろう。

【井上さん】かなり前に井上さんから、娘たちが帰ってくることを聞いていた。井上さんは半年ほど前にご主人を亡くした。娘が二人いるが、遠くに嫁いでいる。父親の初盆だからと言って帰ってきた。いつもは奥さんと犬一匹の静かな家が大騒ぎである。それぞれのパートナーと幼児から小学生までの子供たちが5人である。台所と仏間の二間続きの空間は、泣いている子供、犬を追い回す子供、テレビを見始める子供たちでごった返している。私は仏壇の前で縮こまって座っている。井上さんは、私に接待ができないことを詫げる。詫げながらその顔は嬉し

そうである。悲しいはずの初盆に参ってきたのだが、なんか楽しいお盆だ。

【海野さん】私がお参りに行くと、五人で待っていてくれた。いつもは海野さんと80代後半のお母さんの二人の家族である。海野さんは昨年に60代半ばのご主人を亡くした。長男は半年ほど前に、遠くに転勤になって一人住まいである。次男は先月に結婚をした。今日はその奥さんと並んで座っている。私は若い奥さんに初対面の挨拶をした。ニコニコしている若い奥さんに「笑顔をお父さんにお供えしてくれるのは、ありがたいね」と言った。そうしたら、長男も「僕も結婚が決まりました」と笑っている。

そんな挨拶の後、私は仏壇に向かってお経をあげ始めた。背後で男性の鼻水をすする音がする。デュエットのようだ。この一年は、彼らにとっても辛い一年だった。かつて、海野さんが「主人が亡くなった後、息子があんなにしっかりしているなんて、思ってもみま

せんでした」と言っていた。かつては賑やかな海野家だったが、今はおばあちゃんと海野さんの二人暮らしである。家族のそれぞれが人生の新たなステージを歩み始めたようだ。今年のお盆はそんな報告会のようだ。

【江藤さん】江藤さんのお宅に約束の時間にお参りに行くと、奥さんが一人で座っていた。昨秋にご主人が亡くなって奥さんは一人暮らしなのだから、奥さん一人というのも不思議ではない。朝、長男から新幹線が集中豪雨で動かないと電話があったそうだ。母は無理せずに自宅に帰るように言った。江藤さんは長男夫婦もいれば長女夫婦も次女夫婦もいる。どんな事情があるのかは知らないが、子供たちの存在感が薄い。それは、江藤さんのご主人の闘病中も、奥さんだけが介護をしていた印象がある。

子供たちは独立した。江藤さんは息子や娘の配偶者に頼み事をしないようだ。独立した人間の関係において、必ずしも頼み事をし

ないというものではない。江藤さんは息子や娘やその連れ合いに「いいお母さん」なのだろう。面倒な事を言わない「いいお母さん」は、「どうでもいいお母さん」になりはしないか。杞憂であってほしい。

江藤さんは来年のお盆には、私に参ることを頼んでくれるだろうか。家族に「坊さんが参ってくるから、帰ってきて」と言ってくれれば嬉しい。

【小原さん】10年ほど前のお盆にお参りをしたときにおじいちゃんが高校生の孫を紹介してくれた。夏休みにおじいちゃんのところ遊びに来ているのかと思ったら、数メートル先に自分たちの家があるという。その翌年におじいちゃんは亡くなった。お葬式があって家族構成を知った。小原さんは、数メートル先に自宅が会って、夫婦と子供は姉と弟の四人家族である。お葬式の後はお参りの回数が多くなるので少しずつ様子も伺い知れる。父親の居心地が悪そうだ。娘が父親に対して

否定的な視線であった。母親も父親に距離をとっているように感じた。それから、父親は転勤が決まった。単身赴任である。父親は、帰れるときは一生懸命に帰ってくる。同僚の車に同乗させてもらったり、バスに揺られて帰ったりしていた。昨年のお盆は、私がお参りした日に父親が帰省する日だった。数キロ先の高速バスのバス停に息子が自家用車で迎えに行った。入れ違いに、父親が歩いて帰ってきた。程なくして、帰ってきた息子に、父親は礼を言った。感謝の気持ちを込めての言葉だった。

昨年、誰かにうわさ話として聞いた。小原家の息子が高校生の時に、何かで不登校になったらしい。その時に父親の発した言葉で、あの家族は上手くいかなかったと。爾来、彼はほとんど家に居る。しかし、昨年のお盆の日に息子は父親をバス停に迎えに行った。

昨年のお盆に、私は息子に短期の海外留学にでも行かないかと言った。ほとんど家に居る息子に

出かけてほしかった。今年のお盆にお参りをしたら、姉が仕事を辞めてワーキングホリデーで、カナダに行ったと言う。そんな家族の様子を聞いているとき、息子が僕もカナダに行ってみようかなと言った。両親は、ぱっと嬉しそうな顔になった。

この家族にはいろんな試練があったのだろう。家族はお互いの手を離すまいとしてきたのだろう。私は父親の行動にその意志を感じた。だからと言って、この家族の問題が一気に解決するのではないが。おじいちゃんが亡くなってからお参りの時にはできる限り家族がそろってお参りをする。父親は今も単身赴任先から一生懸命に帰ってくる。そして、家族は仏壇の前でそれぞれが、何かを語る。私は一度もこの家族から相談をされたことはない。いつも家族ドラマの観客をさせてもらっている。

3. 坊さんの立場

私は、お盆のお参りでは法話

をしない。法話とは、仏の教えを話すことである。浄土真宗ではお経と法話はセットになっているのだが、祥月命日やお盆のお参りでは私は法話をしない。私は聞き役になる。私は市井の生臭坊主であるのだから、どんな話しにも乗るようにしている。私は住職になってから、他者の話を聞く勉強をしておけばよかったと思う。これから坊さんに成る人には、他者の話を聞く勉強をしておくことを勧めたい。

坊さんの中には人に悩みを語られることで、自分が偉くなったような勘違いをする人もいる。だから自分がすべてを掌握しないと納得しなかつたり、自分の力で解決できると勘違いをしたりする。私たち坊さんは、仏を背に座ることが多い。人は私の背後にいる仏に向かって話しているのかもしれない。

蛇足ではあるが、仏は就職や縁談の世話もしないし、病気を治したりもしない。歳をとるのを止めたりもしないし、死を止

めたりもしない。宝くじも当て
てくれたりもしない。でも、仏
に向かって語ることに意味があ
ると思う。

4. まとめ

今年、あるお家で私がお盆のお
参りを済ませたら、これからみん
なでバーベキューをしよう。お
じいちゃんが亡くなっておば
あちゃん一人暮らしになった家
に、みんなが集まって、バーベ
キューだそう。一昔前なら考えら
れない初盆だが、私はいいお盆だ
なあと思う。お盆は変わってきた

なあと思う。

はじめにも書いたように、お盆
は盛んになってきている。それは、
家族の行事となっているからだ
と思う。家族が、亡くなった家族
に語りかけ、お互いの繋がりを確
認している季節なのかもしれない。
仏に家族の問題を語ったとこ
ろで、その解法を教えてくれるわ
けではないが、その意味はあると
思っている。

来年のお盆は、もっと忙しいお
盆になるかもしれない。来年も暑
いだろうなあ。